



かわら みず 河原の水たまりにいるアメンボは、どこからわいてきたの

アメンボは飛んでくる

川の流れる水が減ってできた、川原の水たまりに、アメンボがいるのは、どこからか飛んできたのです。アメンボは、あまり飛べるように見えませんが、500メートルぐらいはなれたところから、飛んできている例があります。水たまりが、かわいて小さくなったら、またどこかへ飛んで行くでしょう。

アメンボは、水面で獲物をとらえる

アメンボは、全身に細かい毛が生えていて、足から水をはねつける油のような物が出ているため、膜のようになった水面を、すいすい動き回れます。水面に虫などが落ちて、ばたばたあばれるときの水面のゆれで、獲物を見つけ、すぐやってきます。そして、水にぬれてうまく動けない獲物に、注射針のような口をさしこんで、体液を吸います。ちょうど、クモが網にかかった獲物をとらえて、体液を吸うのとよく似ています。

アメンボの産卵と冬ごし

アメンボは、5月ごろ交尾(オスが自分の体質などを伝える遺伝子をメスにわたす)をして卵を産みます。アメンボの種類によって、少しちがいますが、卵は水中の植物のくきや、石の表面などに産みつけられることが多いのです。ふ化した幼虫は、親と同じように水面にのり、小さい虫の体液をえさにし、5回だっ皮して、成虫になります。

11月ごろから、アメンボは、水辺の近くのかれ草の間などにかくれて、じっとして冬をこします。3月ごろから、また、水面で活動を始めます。(監修・中山 周平)

